

子どもへの見とりと手立ての広がり：
国語科授業実践の変容から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鏑木, 豊実 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007231

子どもへの見とりと手立ての広がり

～国語科授業実践の変容から～

静岡大学教職大学院 教育方法開発領域 鍋木 豊実

1. はじめに～目指す授業像～

本研究で述べる「未来をひらく微生物」の授業時には、筆者は子どもが学んだ知識や考えを「説明する」学習活動を想定した。「説明する」ことは、分かっていることを相手にわかりやすく伝えると活動を通して分かり直すといった学びをメタ認知する意図をもつ。メタ認知を通して培った知識が、子どもたちに意識して使える力を育むのである。

こうした学習活動を実現するための授業スタイルとして、子どもたちが互いの意見をつなぎ、意見の相違から子ども同士で深めていくといった協働的に学ぶ授業を目指した。協働的に学ぶ中で関わりあうことは、学力を身につけるためだけではなく、生徒が自分と他者の差異から自分の意見の確かさを認識し、また教師にとっても子ども一人ひとりの意見を認めることができる環境をつくる。そうして、子どもたちがいきいきと授業に臨むことができるものであると考える。

子どもは教師から与えられる知識ばかりを学ぶ受動的な学び手ではなく、能動的に自分たちで学んでいくこともできる有能な学習者でもある。したがって、協働的な学習活動の経験を通して子どもたちは自発的に学び、自分にとっての良いコミュニケーションの手段を模索することが期待される。学校の集団で学ぶ意義を考えたときにも、協働的な学びを通して人と関わる経験はコミュニケーション能力を育む上でも意義のあるものとなるだろう。

2. 研究の目的

本研究に先立って、国語の実践を終えた。その時、校長先生から「先生（筆者）は、普段このクラスにはいっていませんか。どれくらい子どものことを知ることできていましたか。子どもを知らない授業はできません」といった子どもとの関係性の面での指導を受けた。教師と子どもとの関係によって授業における表れが変わってくるといった示唆から、子どもとの関わりを十分に理解していくことを実習での重要な課題として位置付けた。

本研究では、筆者のこれまでの国語科の授業実践を考察し、筆者の授業における子どもの見とりかたや手立てを見直し、平成23年度中学校国語科新規採用教員として教壇に立つ筆者自身の授業改善に役立てることを目的とする。無意識的に行われていた子どもへの見とりや手立てについて可視化や言語化を図り、教師としての力量の向上に資する実践研究へとつなげていく。

3. 研究の方法

研究の方法は、PDCAサイクルを活用した授業研究を主体とし、授業の計画（P）—実践（D）—課題の分析（C）—一次単元への示唆からの実践（A）といった観点で自身の実践をまとめる。実践にあたっては、事前・事後指導をもとに授業計画を立案し、授業観察や大学院の学び等を踏まえての授業実践を行った。

本研究の実践を行った実習校はS市立A中学校で、筆者は平成21年10月より約1年半にわたり週2回の実習を行っている。A中学校は郊外に位置しており、1年生172名（5学級）、2

年生188名(6学級)、3年生181名(6学級)の全校生徒541名(17学級)の中規模校である。主に国語科の教員に付いて国語の授業での授業観察と個別支援を中心に実習を行った。また、3つの単元での国語の授業と、道徳の授業と合わせて計15時間の授業実践を行った。

3. 実践報告

S市立A中学校での国語科授業実践の内容は表1の通りである。各単元の実践は、筆者の授業について継続的な分析を行いながら筆者の成長と課題を明らかにし、授業改善を図った。

表1 授業実践の内容の一覧

教材名	実践時期	実践内容	筆者の課題
「漢詩の風景」	平成22年 1月15日 ～18日	実習校の先生からもらった授業計画で行った。返り点、表現技法、作者の特徴等についての説明を中心とした授業展開を図った。	実習校のB先生との発話の比較を行い、発問や課題提示の仕方等の指導技術についての課題意識を抱いた。
「にじの見える橋」	平成22年 6月8日～ 15日	筆者が教材研究を行い、授業計画を立案した。初発の感想から出た意見を参考に発問を行いながら、作品の主題についてグループ活動で考える授業展開を図った。	生徒のつぶやきや意見を拾おうとしたが、意見をつなげたり授業に生かしたりすることができなかった。単元構想についての課題意識を抱いた。
「未来をひらく微生物」	平成22年 12月14日～ 21日	事前に協議を重ね、単元構想の充実をはかったうえで授業計画を立案した。教材の内容を読み取った上で、段落の構成についての自分の考えを説明し合う授業展開を図った。	国語科授業実践において、子どもをどのように見とるかといった手だてと子どもの見とりに沿った手立てについての課題意識を抱いた。

まず、最初に実施した「漢詩の風景」の単元においては、教えた内容を理解できることを第一と考え、知識を中心に教えて習得させることを目的としていた。そのために、教師の説明中心の授業展開となっていた。また、授業中の生徒の様子を見ると発言が見られない時があったり、理解できていない生徒がいたりしたことに課題をもち、発問や課題提示といった指導技術面についての改善を意識することとなった。

この授業実践の後、5月に行われた富士市立元吉原中学校や藤枝市立青島東小学校への訪問実習に参加し、児童生徒同士の意見の交流が盛んに行われている授業に魅力を感じた。こうした学びを踏まえ、生徒が意見を発表し、互いの意見を交流し合う授業の実践を目指すようになった。

次に、「にじの見える橋」の単元では、訪問実習での学びから教師が生徒の意見をつなげる実践をすることを意識した。しかし、実際の授業では生徒のつぶやきを拾うだけで意見をつなげる手立てがなかった。また授業も一問一答形式の発問と応答となってしまう、「漢詩の風景」の単元と

同様に教師が教えることを中心とする授業展開となってしまった。

本年度最後の実践となった「未来をひらく微生物」の単元は、今までの授業の反省を踏まえて目指す授業を具体化しようと臨んだ授業実践だった。特に、生徒が分かっていること、また分からないことを分かり直す授業を意識し、段落構成についての自分の考えや意見を文章中の表現等の根拠に基づいて相手に説明し合う活動を意図的に取り入れ実施した。結果として、段落構成について話し合うグループ活動では、他者の意見を参考にしようとする生徒や、感想用紙に根拠をもって自分の意見を記述しようとする生徒の表れが見られ、目指す授業に近づいた授業となった。しかし、研究の目的でも述べたように教師と子どもとの関係、教師が子どもを見とれていなかった点が更なる課題であることを認識した。

4. 考察～成果と課題～

筆者の3つの単元の実践の分析を通して、各授業における手立てを図1のように示した。こうした分類から、実践を通して筆者の授業力量の向上が図られてきていることが分かった。

①②教材開発と指導方法の手立て

最初の実践である「漢詩の風景」の単元は、あらかじめ授業計画が与えられており、教材開発についての手立ては見られなかった。次の「にじの見える橋」の単元では、筆者自身で教材研究を行い、理解させたい作品の内容・価値に迫ろうとした。一方で、指導方法については、説明が中心であったり、一問一答形式の発問が多かったりしており、これらの2つの単元の実践は、教師のねらいに引きつけようとする授業となっていた。

こうした反省を活かし、「未来をひらく微生物」の単元では、教材の内容だけでなく段落構成などの形式面からも広く教材を研究した。また、生徒の既習知識から意見や考えができるように考慮した教材開発を位置づけ改善の手立てを講じた。さらに、学習形態においても一斉学習で内容を抑えた上で、グループで話し合っただけで生徒の意見を交流し、全体で共有した後にそれをグループに戻すといった学習形態の活用への手立ての広がりにつながっている。このような手立てから考えを説明しあう生徒の表れが見られたため、生徒のわかり直しを図り、生徒の意見をつなぎ理解を深めるといった筆者の授業観に近づいた手立てとなった。以上から、筆者の授業観と教材開発や指導方法の手立てがつながってきており、筆者の授業改善が図られていたことが分かった。

③④授業計画段階と実施段階における子どもへの見とりと手立て

最初の「漢詩の風景」の単元では、授業計画段階で子どもの見とりや手立てが見られなかった。次の「にじの見える橋」の単元では、学級集団の学力や規律といった面から見とりを行うようになっていた。最後の「未来をひらく微生物」の単元では、学級集団の学力や規律のみならず支援を要する子どもへの手立ての予測、国語の知識・技能で課題とする力と活用したい力といった生徒の見とりへつながっている。このように、授業計画段階において生徒の実態を把握し授業計画を立案する手立てが確立された。また、授業実施段階の子どもへの見とりでは「にじの見える橋」の単元は、特定の生徒に対する支援や授業後の感想用紙からの意見の把握といった子どもの見とりがあった。「未来をひらく微生物」の単元では、特定の生徒だけでなく、個々の生徒の意見を把握し班活動や発表に際して指名発言や呼名を行ったりして生徒の意見を生かそうとしており、生徒を見とる筆者の視野が広がってきていることが分かった。

以上のことから、研究テーマとして挙げた「子どもへの見とりと手立ての広がり」が見られ、実習校での実践から筆者の授業改善が図られた。

5. まとめと今後の課題

分析より、授業実践による実践的研究を通して筆者の授業観の変容、国語科授業実践における手立ての広がり、そして授業観と授業での手立てが一致してきていることが分かった。さらに子どもを見とる手立てや子どもの実態に即した指導を授業に位置づけ、具体的な方法を実践することができるようになった。その一方で筆者の課題についても本研究で見受けられた。

「未来をひらく微生物」の単元でのグループ活動において、班全員で話し合いが行われているのではなく、理解度も十分な規準に達していない班が多いことが分かった。こうしたことから、つまずきのある生徒や低学力の生徒への対応が筆者の大きな課題であることを認識できた。こうした課題について、授業での子ども見とりのみならず日頃の学級経営や生徒たちとの関わりの中で生徒を知ることも重要であると考える。特に、生徒との信頼関係を築くことで、生徒の積極的な授業参加も期待される。新規採用教員として教壇に立つてからは、授業を通してつまずきのある生徒を見極めるとともに、日々の関わりの中から生徒との関係を築くことで「子どもの見とりと手立て」を充実させ、実践的な指導力を高めていきたいと考える。

教材	「漢詩の風景」	「にじの見える橋」	「未来をひらく微生物」
授業観	教師の説明中心の授業	生徒の意見をつなげる授業	生徒の意見をつなげて理解を深める授業
①教材開発の手だて			
②指導方法の手だて			
③授業計画段階における子どもへの見とりと手だて			
④授業実施段階における子どもへの見とりと手だて			

図1 筆者の授業観と国語科授業実践の変容